
月 刊

MéLange

vol.91



2014.05.25

詩と評論

月刊

「Mélanges」 VOL.90

2014
05
25

月刊
「Mélanges」
編集部

この著作は一九五八年に刊行。政治思想家ハンナ・アレントの集大成といわれ、いくつかのテーマが内在しているがそのうちの三つをとりあげてみる。

第一に「活動的生活」について。そもそも人間の条件とはすべての人間の置かれた状態、人間が本来的に条件付けられた存在であることという。そして人間は存在それ自身が自然世界に働きかける活動をすでに条件付けられているのだ。アレントは「活動的生活」を「労働」labor、「仕事」work、「活動」actionの三つに分類する。これらが西欧の歴史・政治にどのような関わっていたかを説明していく。アレントの特異な歴史観は現代から過去を眺めるといより古代、とくにギリシャ時代から近、現代を照らして根源的な何かを探りだそうとするようだ。

第二のテーマは「複数性」。アレントは第五章の「活動」のなかで、誕生を活動の始まりと定義付け、人間は一人で生まれることができない、生まれながらにして複数の人間（家族）と係わりを持つという。多数（集団や大衆のマス）と異なり複数は一一人一立場や個性の違う、唯一無二の人間たちのことである。

第三のテーマとしては公的領域と私的領域という人間生活の「場」の考え方である。公的と私的の関係は古代ギリシャではポリスと家庭の関係で互いに並列であるが、近代に入つて社会的領域が出現、私的に閉ざされた諸事が公的領域に、つまり政治の場での重大な関心事になる。「家」は拡大され、社会は人間を単一の巨大家族の成員であることを強いてくる。近代における国民国家の概念が立ち現れるということらしい。らしい、というのには私には先の『全体主義の起源』と

HANA 便り 03

異なる論述に惑いながらも人間と国家のあり方に眼が行きがちになるからだ。私は本著を、『思索日記』I-IIを索引がわりに広げてやつと読み通すことができた。字面を追うところから一歩二歩入り込めたかと思う。後半の第四章あたりから読み慣れにくる。随所に強い口調のテーゼのような言い切りが現れるが、「しかし」「すなわち」といいながら、はくでもなくくましてゆくではないがあたかもくまうでありくまうのいうくまうでありながらくまうではなくという書法は幾度も繰り返される。文が網目に広がり枝葉にわかれ、丁寧な意味を掬おうとすると全体が見渡せず、一体なにが言いたいのかわからなくなる。訳者の志水速雄氏によると作者の母語ではない英語表記に特徴がありセンテンスが長く複文が重なって難解になっているという。翻訳に際して短くわかりやすい日本語をめざしたとあるが、何冊かアレントの解説書に眼を通したが、それぞれがそれぞれに難解さと視点のズレがあり、やはり「本丸」を攻めるのが一番かもしれない。

「労働」「仕事」「活動」に関してはマルクス批判がなされているが私にはピンとこなかった。むしろ最終章の〈活動的生活〉と近代が興味深かった。近代の入口の大きなできごととはアメリカ大陸発見と宗教改革、望遠鏡の発明をあげる。どこまでも西欧的発想の切り口ではあるが。

読書は手の届かないモノでも思い切り無理をしてみる。たまにはいいかもしれない。

※ちくま学芸文庫『人間の条件』

中堂 けいこ

特集／寺岡良信著『龜裂』

兄のこと 詩のこと……………寺岡孝憲 04
 寺岡良信第四詩集『龜裂』に寄せて……………岩脇リーベル豊美 05
 偏愛と献身〜寺岡良信詩集『龜裂』に寄せて……………富哲世 06
 管見 寺岡良信詩集 龜裂……………堀本 吟 07
 書法への抗い……詩集『龜裂』寺岡良信を読む……………中堂けいこ 15
 寺岡良信詩集『龜裂』の感想……………藤井かえ子 17

詩

ひそかな裸足……………安西佐有理 11
 いない猫のにやにや笑い……………福田知子 12
 『ゆきくれて』へのオマージュ、そして……………有時秀記 13
 プラスチックな海……………月村 香 14
 列聖……………岩脇リーベル豊美 14
 選択……………川田あひる 15
 歌う人……………上野 都 16
 川柳連作 赤毛同盟……………情野千里 17
 化身……………大橋愛由等 18
 誰のための世界というか……………中堂けいこ 19
 花はいつでもそこにあった……………富哲世 20
 約束……………寺岡良信 21
 たずね人……………野口 裕 21
 眼鏡をはずしたら出かけよう……………高谷和幸 22
 青い馬……………にしもとめぐみ 22
 ハライソ……………今野和代 23
 アマガエル……………中嶋康雄 23

エッセイ

連載第3回／HANAだより 〈『人間の条件』について〉……………中堂けいこ 03
 <神戸詞あしび>80「浄土庭園に漂うタナトスと廢園」……………大橋愛由等 24

編集部だより★12／小説家であり詩も書く千田草介氏に第91回「Melange」読書会の発表者を依頼。歴史小説も書く千田氏を選んだテーマは、黒田官兵衛。播磨出身の軍師と言われた武将で、その知略に富んだ官兵衛がいかに乱世の時代に、播磨を地盤にして生き抜いてきたかを語ってもらう予定です。また、千田氏の語りの前に、元高校日本史教諭である寺岡良信氏が、戦国時代について教科書で教えられている内容をあらためて予習していただきます。播磨が生んだ傑物である官兵衛は、東西両陣営(織田と毛利)に挟まれて苦悶し、生き残るために播磨でなにを考え、どう行動したのかを知るのには、今年のNHK大河ドラマを見る際にも大いに参考になりそうです。(大橋記)

兄のごと 詩のごと

寺岡孝憲

一九六五年頃の話ですが、当時兄は高校生で放送委員会に所属してました。放送委員会には校内放送のための予算があり、兄はもっぱら日本の現代音楽のレコードを買っていたようです。レコードが来るとすぐに自宅に持ち帰り一、二週間ほど置いておくので、私も聴くことができませんでした。「能面」や「管弦楽のための木挽歌」、「弦楽のための三楽章」などがありました。中でも印象に残ったのは清水脩のオペラ『修善寺物語』です。新歌舞伎風台本と現代音楽の書法が不思議にも調和する世界に少年の私はぼんやりと日本の芸術が志向すべき方向性を感じ取っていました。

この時代は創作オペラが盛んで、その後私は『俊寛』や『鳴神』を知ることになります。特に思い出に残っているのは別宮貞雄の『有馬皇子』です。母と一緒にFMで聴きました。「警代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまた還り見む」の歌に母が聴き入っていた様子は今でもはっきりと覚えています。大正期に神戸で生まれた母は文化や芸術に強い関心を抱いていました。結婚後は日々の暮らしに追われて教養などとは無縁の日常を送っていましたが、兄の影響で私が芸術音楽を聴き始めると、娘時代の憧憬が一度に蘇ったように、ベルリン・ドイツ・オペラの来日公演をテレビで熱心に見たり、美術展に出かけるようになりまし

た。この頃、兄は京都にいましたが、母も度々都を訪れては寺社や庭園を楽しむようになりました。大学生となった私が家を出た後は、神戸に來演する歌舞伎と文楽公演が何よりの楽しみにになりました。このように我が家にとって兄はさながら文化の伝道師でした。それにしても、日本の前衛音楽に関心を持つとは、兄は随分と早熟な高校生だったようです。黛敏郎の『涅槃交響曲』が梵鐘の分析と再現であると私に教えたのもまた兄であります。

ところで、『龜裂』に収められた兄の作品には物語詩の要素が多く見られます。私はドイツ文学を専門にしておりますが、バラードあるいはロマンツェと呼ばれる物語詩は十八世紀末から十九世紀前半にかけてドイツで盛んに作られます。私の主たる研究対象であるハイネの最後の詩集である『ロマンツェーロ』（ロマンツェ集の意味）は題名の通り長短様々な物語を韻律に乗せて語って行きます。その中の一つ『イエフダ・ベン・ハレヴィ』に「世にも名高いこれらの真珠も／水底で愚かしく身体を病む／哀れな牡蠣貝の／青白い粘液にすぎない」という一節があります。真珠Ⅱ病という形象は十五年ほど前に書かれたドイツ・ロマン派論にも出てきます。ロマン派を病的だとして退けたゲーテを意識しつつ、真珠が真珠貝にとつての病であるように、詩そのものが人間にとつての病ではないかと問うたのです。西洋では、真珠は貴婦人の胸元を装う美しい飾りものであるとともに、涙の象徴でもあります。「イエフダ・ベン・ハレヴィ」においても、ハイネは偉大なユダヤ詩人ハレヴィが遠いエルサレムを想って流した涙を真珠に喩えています。癌を患う兄の詩集『龜裂』もまた真珠Ⅱ病Ⅱ涙Ⅱ詩という詩的な連想の中で揺つているように思います。

寺岡良信第四詩集 『龜裂』に寄せて

岩脇リーベル豊美

寺岡良信第四詩集『龜裂』のご出版を、時間を遣えずとはならなかつたが、詩人にも関係者各位にも全心より祝福させていただきたい。これは、「遙かな」距離があるということであり、また今年は、復活祭の祝日が遅く、郵便事情の混雑が重なったことも、偶然であれ、運命であれ、不達の日々に心を砕いていただき、ご本人の心情を思うと大変申し訳なく、それでも、女神は必ず無事到着するものだということ、遙かではあるがその間、常時同慶でいられたということに感謝の意をお知らせしたくて、不慣れな書評を書いている。

寺岡良信氏の新詩集をはじめ手にして、その第一印象は、実は、開眼ともいふべき驚きだった。突拍子もない評を弄していると思われるも仕方がない。評者の寺岡氏と出合いは、福田知子氏を介して2008年3月神戸・カルメンで同人として受け入れてくださったときに始まる。「めらんじゅ」同人の方々ともそのときに始まるが、その方々と比べても時間的にも永劫とは言えず、また、年に一度ロルカ詩祭で末席を汚させていただけの身として、批判をいただくばかりの身として、新詩集に対し、驚きであるとの評は横柄な謂いであるかもしれない。しかし、詩集『龜裂』として手にとり、読み進めてみると、やはり新たな驚きであったのである。電子メールで送ってくださったたり、詩誌「めらんじゅ」にて読ませていただいた作品もあり、寺岡氏の「あとがき」にもあるが既に発表・改筆された作品も収録されていて、わたしは寺岡詩を知っているつもりでいた。抒情、唯美、クラシカル、切実、音律の如く……様々な語句が思い浮かぶ。日本語に関する限り自分は「ナシヨナリスト」だと称する詩人だからこそ―文体や語法が排他的という意味ではなく、極限への遡流という意味であると思う―言語の美の追求はここでも不変であることは言うまでもない。

だが、わたしは『龜裂』のなかに前作『凱歌』にも増して強く、論理性、人倫性、実践性といった観点を内包する、ひとつの体系なるものを認めたような気がする。寺岡詩の美しさは曖昧模糊とした美しさではなく、その体系の峻厳さに決定せられた美しさであると思う。それは、

真／偽や美／醜といった対立概念を超克したところの、しかも、その觀念のみのスパイラルに嵌まり込まずに、宇宙的論理にまで拡がりをもつような超越である。

その表徴として幾つかあげてみる―四人と看守の相互聯関、少年の銀河への慾望とその肯定、解放と昇華（「鍵穴」）。画家と少女、死の誘惑と羽撃きの嵐、都という慾望との別離（「誘惑」）。祝福を受ける斑猫の苦悶、最後の寶石となる可能性を示唆する羊歯の化石（「斑猫」）。置き去りにされた海の蒼い崖、石となつた巻貝、官能の抜糸（「遺棄」）。アルペジオ、左手だけの詩人の裏切つた疼きを悲しく思い遣るトゥオネラ川の白鳥（「連弾」）。寺岡詩は、単なる美では包括できない、生の残酷に裏付けられた美、もしそうでなければ、人間であることの苦惱、狂躁に根拠付けられていなければ美しいと感じられないはずの、パラドックスとしての美という幻影、否、むしろ真実を觀照している。

そこでは、秋の訪れた高原にて、牛飼ひの鳶色の瞳の奥に／私は私自身の姿をまざるのであるが、常に他者との関わりの中に、私は使ひふるされた甕である（「龜裂」と告白するのである。寺岡詩は時折、性差をも越えて、如月の満月に投身する雪女郎となり、顧みられるすべもない魂のために、わたしはわたし自身の姿を／赤い蠟燭の絵に書いて、苦しく炎を灯そうとする（「投身」）。織女という無垢な女に返照させて、繰り返し陽炎に溶ける錆びた銃身が／わたしだ（「銃身」と、泣きながらも勇健な自己定義を行うのである。抒情をひとたび括弧にいれたあとで、ふたたびその場所を確認するために遡流するような自己定義である。

そして、寺岡詩の宇宙的論理が、他者に連結した星座のうちに確立された自己を無味しながら、だからこそ同時に、ひとの営みの一切である文明さえも、ヴィーナスが誕生した朝にまで遡って回想されるのである。海に生まれた文明を虹に譬えた人たちに向かい、何と的確な命名であったことか／虹は悔いの同義を物語つてゐるから（「女神」という真相で、詩体系を完結させるのである。語っているのはもはや詩人ではなく、滅びの女神、虚空のまぼろしの女神そのものであるように思えてくる。

横柄な評で祝福に代えさせていただきたい。2014年復活祭の月曜日に、詩人通りより。

偏愛と献身

寺岡良信詩集『龜裂』に寄せて

富 哲世

言いたい気持ちがあふれてしまつて、かえつてうまくことばに行き当たらない、何かを伝えねばならない場面で、ことばの壁に突き当たるとうな、そういう息詰まる思いを味わうことがある。われわれにはおなじみの、そんな自身への不同意と不調和を手探りしながら、ことばに先立つ内面世界の深みや広がり、美の桎梏によつて明知として掬いあげようとするのが、寺岡詩の世界かもしれない。ことばによる自由とは、そもそもことば自身の縛りのなかにしかありえないというのもまた、わたしたちのよく知るところである。

すでに最終判決は下り、不帰刑の宣告を受けているのがわたしたちこの世の者の身の上である。『ヴォカリーズ』『焚刑』によつて亡き父母を送り、募る自責の念として、己れの孤独の歴史性に目覚めた詩人は、『凱歌』によつて地平を拡げ、その培われた哀しみと怒りによつて、個を超えた、伝説や、暮らしの悲劇の有様に客観の目を配り始めた。それらは、別れと出会いの日常をくりこんだ、原点への眼差しというものでないだろうか。社会や個の幻想性の抛つて立つ、関係性と時の、起源へと赴く眼差しである。ここに来てすでに白鳥は、天へと解き放たれていたのでないだろうか。

詩人にとつて溢れ出るものとは、他ならぬ〈音楽〉であった。詩人の一生は、響きが無名の響きを呼ぶ、この鳴り止まない心底の〈韻律〉に つた者も、日々の哀傷を抱えたまま何者かの隠喩となつて、漂流しつづける永遠の未帰還者として永遠の時を刻む。それはそれによつて今が慰撫されるよりほかない、先取りされた爾後の風景である。

第二部中間部。回想の中を覗き込むように、不思議な浮遊感のなかにあるなつかしげなこの三つの歌は、詩人に陰影を投げかけ、ひとときたりとも詩人のそばを離れたことのない隣室への、惜別を籠めたいま一度の挨拶でもあろうか。詩人は果たして生涯、この部屋の住人でもある。

そして全ての人称と登場者たちは、〈わたし〉に向かつて歩きはじめる(第三部十篇)。

第三部にいたつて詩は、個的な命運に直面しようとする。影法師がわたしを見捨てて立ち去っていくように、命の匂いを嗅ぎ当てながら、わたしがわたしを立ち去つてゆかねばならない寂寥は深い。だからこそ

よつてあらかじめ決定づけられているのかもしれない。詩のことばは、その根源の音楽に明確な耳の席を与えるための、意味への変換装置でもあろう。韻律の川は、情感となつて溢れだし、情感はさすらう流木の身となつて流れに身を任せ、「美」へと流れ着く。

存在の切り岸に立つてますことばの自在さを増してゆく新詩集『龜裂』は、悲歌へと収斂してゆく現代日本詩における唯美のひとつの極である。悲歌がまぎれもなく言語自身への讃歌でもあるその美は、その高度と純度において、イミテーションでも停滞なのでもない。ことばの無制限な逸脱と詩の変容に慣らされたわれわれの無防備なところの襲に、それが対自の同時代性をなお保有していることが、楔を打ち込んで来るからだ。星座の淋しさは孤独な航海の淋しさだろうか。彼は清浄な闇の湖にたゆたう小舟の上で蒼く妖しく燃える孤独の瞳となつて、月光や天の星々と話すのである。また潮が洗う島嶼の砂や煙めく青海波と話すのである。いや、彼の自然への感応力には何の淀みもないが、自然の奥に変容の本質を見定める、そういう隠喩を超えた照応の語力があつてこそ、星座は星座として、月光は月光として波は波としてわたしたちを誘惑し、その不壊の輝きと光の繭糸で見えない衣を織り上げることができるのだ。その語り口の、なんと深く、優しげなことであろう。

この三部構成で成る交響組曲の詩法を一言で言えば、迫り来るものとしての美の顕現ということだろう。想像の彼方から、夢の先から訪れて来るものが、この身の皮膚を通り越して今に迫り来る姿を、過去も現在も震える予兆に染めながら在るものとしてあらしめようとする。自然もまた、流転しながら〈その先〉から迫り来るものとしての自然であるかのようなのだ。

第一組曲の十篇。淋しさはこの詩集全体を浸しているが、ここでは特に、さみしさのn個の諸相が語られているかのようだ。この登場者たちは、ことが過ぎ去つたあとの残響の小宇宙で、死者である者も生者である語り尽くせないほど溢れ出す哀切の深淵を、美の覚悟性によつて必死に支えようとするのだ。その一期の、尽きない尽力のうちにはからずも、喪失の永劫の歴史時間に相応しい、飛び立つ白鳥の影のような、滅びに堪える永遠の現在が、垣間見えてくるかもしれない。詩人の美の世界に浸つたわたしたちは、それが美の名のもとに語られていることさえ、忘れてしまひそうだ。たつた一度きりの生！韻律も意味も押し流してしまふ空無の河水(トウオネラの流れ)に触れる、胸塞ぐ刻印が、その美の向こうに聴き取れはしないだろうか。

ハハ、わが身を削るほどのこの美への偏愛と献身は、果たして愚かな所業であろうか。ひとつの人称の物語の家に棲まうひとは、ひとつのうたを歌うことしかできない。寺岡良信の詩の営みは、きょうもつづいていて、あすもつづいていて、われわれはひとまず、そのことに満足するのだ。

管見 寺岡良信 詩集 龜裂

寺岡良信詩集『龜裂』(まろうど社)(2104・3・25)

堀本 吟

一部鍵穴。落丁。誘惑。系譜。漂流(鍵穴との連関)。棄教。斑猫。出棺。投身。放逐。

二部王様(改作)。幸福(改作)。海市(改作)

三部龜裂。陋屋。連弾。銃身。姿態。砂浜。客車。銀河。女神。あとがき

時代に添った書き方ではない。／近代以後の蒼枯たる美意識にそいながら日本語の彫琢をしている。

略歴1947年 神戸市生 2013年 退職

既刊詩集『ヴォカリーズ』『焚刑』『凱歌』『龜裂』

よつてあらかじめ決定づけられているのかもしれない。詩のことばは、その根源の音楽に明確な耳の席を与えるための、意味への変換装置でもあろう。韻律の川は、情感となつて溢れだし、情感はさすらう流木の身となつて流れに身を任せ、「美」へと流れ着く。

存在の切り岸に立つてますことばの自在さを増してゆく新詩集『龜裂』は、悲歌へと収斂してゆく現代日本詩における唯美のひとつの極である。悲歌がまぎれもなく言語自身への讃歌でもあるその美は、その高度と純度において、イミテーションでも停滞なのでもない。ことばの無制限な逸脱と詩の変容に慣らされたわれわれの無防備なところの襲に、それが対自の同時代性をなお保有していることが、楔を打ち込んで来るからだ。星座の淋しさは孤独な航海の淋しさだろうか。彼は清浄な闇の湖にたゆたう小舟の上で蒼く妖しく燃える孤独の瞳となつて、月光や天の星々と話すのである。また潮が洗う島嶼の砂や煙めく青海波と話すのである。いや、彼の自然への感応力には何の淀みもないが、自然の奥に変容の本質を見定める、そういう隠喩を超えた照応の語力があつてこそ、星座は星座として、月光は月光として波は波としてわたしたちを誘惑し、その不壊の輝きと光の繭糸で見えない衣を織り上げることができるのだ。その語り口の、なんと深く、優しげなことであろう。

この三部構成で成る交響組曲の詩法を一言で言えば、迫り来るものとしての美の顕現ということだろう。想像の彼方から、夢の先から訪れて来るものが、この身の皮膚を通り越して今に迫り来る姿を、過去も現在も震える予兆に染めながら在るものとしてあらしめようとする。自然もまた、流転しながら〈その先〉から迫り来るものとしての自然であるかのようなのだ。

第一組曲の十篇。淋しさはこの詩集全体を浸しているが、ここでは特に、さみしさのn個の諸相が語られているかのようだ。この登場者たちは、ことが過ぎ去つたあとの残響の小宇宙で、死者である者も生者である語り尽くせないほど溢れ出す哀切の深淵を、美の覚悟性によつて必死に支えようとするのだ。その一期の、尽きない尽力のうちにはからずも、喪失の永劫の歴史時間に相応しい、飛び立つ白鳥の影のような、滅びに堪える永遠の現在が、垣間見えてくるかもしれない。詩人の美の世界に浸つたわたしたちは、それが美の名のもとに語られていることさえ、忘れてしまひそうだ。たつた一度きりの生！韻律も意味も押し流してしまふ空無の河水(トウオネラの流れ)に触れる、胸塞ぐ刻印が、その美の向こうに聴き取れはしないだろうか。

ハハ、わが身を削るほどのこの美への偏愛と献身は、果たして愚かな所業であろうか。ひとつの人称の物語の家に棲まうひとは、ひとつのうたを歌うことしかできない。寺岡良信の詩の営みは、きょうもつづいていて、あすもつづいていて、われわれはひとまず、そのことに満足するのだ。

龜裂 2048~051(傍線は堀本)

高原に秋が来た

牛飼ひの鶯色の瞳の奥に

私は私自身の姿をまさぐる

私は使いふるされた甕

みづうみに悔いを曳きながら

忘却へ漂ふ白鳥よ

空が流れ落日が火刑の生贄に

従順な羊たちをつらねた

記憶の破片を

危ふくつなぎとめてゐるのも

私に刻まれた

幾筋もの龜裂だ

高原に最期の秋が来たから

払曉には寂しい霧が

龜裂に滲みいるだろう

亀裂に滲みいるだろう
月光と

地層深く眠る泉の
未生のせせらぎ、

言葉を持たないものたちの
透明な意思だけに従つて

私は亀裂から壊れ
土に還る

銀河が
甘い乳なら

それを汲みたいと願つた
牛飼ひも

明日は
ゐない

遺棄

海は大きな沈黙でわたし置き去りにした
時が絶え果てる蒼い崖に

石となつた巻貝のころころにも疼く

官能のかそげさ、
忘れられた抜歯のやうに

銀河
密猟は寂しいたづき

星くづばかりが投網を洩れて
火を焚けば

黎明は記憶に溶ける

わたしたちは

いつ森を逐はれたのか

シヨウヴェ

アルタミラ

ラスコー

洞窟に仰臥して描いた指には

満月に火傷した痛みが

まだかすかに

烙印を押されてゐるか

― 出棺は星の嗚咽が濁くときに

だが

わたしの

死後も

わたしの

息子たちの死後も

永劫につづく

深い

森の喪失

牡牛は牡牛座となつて
蒼く凍つた

密猟はかなしいたづき

まして

冬の銀河は

随感 堀本 吟

★ 実験詩の模索例

かつて前衛俳句が目指した詩性をたたて屹立しています、

★ 美しさの意味

まず、詩という表現領域で、まず、寺岡さんの多行詩が「美しい」ことをのべます。

語彙の選択が極めて厳格で、美しい漢語しかもとめないという世界で、ただそのまま意味を読んだならば、擬古的でセンチメンタルな印象を持つ、しかし、一定の様式の中では心の美しさになりかわり、言葉としての権威を持ちます。

実存上の関心でもある「美しい死」への想像力が、ともに美しい再生を待つて美しい詩になっています（特に最近は・・）。実生活の作者を考えるとそれは痛ましいことですが、しかし、周知のようにそれを言葉で引き受けようとしておられるので、こちらも境界を踏み込みつつも、実存と言葉の境界を行き来しやすいのです、生理としての感情と、言葉の生理を交差し且つ区別できるからです。現実的な意味が剥がれいちど死に、言葉としての権威を持ち始める、この成り行きが詩行になっている。だから、寺岡さんの詩は、美しさがイヤミにならない。

「美しい」という言い方は、ある意味ではたいへんいかかわしい反語の意味合いも含むものではあります、その言い方に込めるあこがれの世界がこれほど素直な意味を持つてわれわれにうったえてくる詩篇はめずらしい、のです。

★ 重ねて言えば、詩（俳句）のレトリックの味わい以上に、彼の詩のテーマが、シンボリックに人生論として読めるといふことと、その上語彙が美しい、となれば、これば媚薬です。それで、詩の精神が感覚で理解されやすい。意味の理解と直感的感覚、この一体感は重要です。詩にあつても俳句にあつても、寺岡さんが真に詩人らしい人生を願うそれを実践している、その心情の高邁な形でとうとうしているのです。

そんな寺岡さんを、現世に生きる詩人のタイプに、仮に振り分けてみるならば、己の美意識を貫徹するダンディズムの極みだと、いえるかもしれません。

★ 寺岡俳句と詩篇の関わり

さらに、その俳句は、彼の詩の凝縮一象徴です。詩篇の修飾を除いてゆくと、彼の俳句の解題になります。でもあるのですが、普通の鑑賞文ではなく、互いに詩語に使つたり俳句語に使つたりその掛け合いの結果、二つの形式の詩に分かれているかのようです。

短い詩篇《遺棄》は、心理、現実、時空に関わる「存在」の風景を、暗喩として表現しています。存在というより存在感・・の象徴的な完璧な風景です。《亀裂》は、「時間と空間」の交流というべきテーマが前面にでて神話をつくっています。《銀河》は、これも時間の物語ですが、傍線のように、唐突に一行がおかれています。読み下すと、575・・めいている。確認できませんが、「北の句会」に俳句として出されたものによく似ています。

このように、寺岡良信さんの詩と俳句は、特徴としては、言葉遣いすべてが美意識に触れる象徴的な物語性があるとともに、詩の形式の分裂、統合、様式の切り替えという実験詩の模索の一例として、鑑賞しうるものです。

★ 自由詩の中の五七五の一行

最初、「めらんじゅ」の詩の会でお会いして、それから、北の句会にも来ていただいている関係なのですが、この方、お気に入り金子兜太の「霧の村石を抛らば父母散らん」らしく、よつばらうとその句が出てきます。一語一語噛み締めるように暗誦される姿はとても印象的なものがあります。

また、句会に、投句される俳句が、人気があるのですが、一読、彼だ！とわかります。他をはねつける独自の様式性があり、その耽美性ただよう文脈に取り込まれたら、うっかり全句をとらされたしまうほどの牽引力です。もともと彼は、短詩形に浸かっている並の俳人以上に形を決めるのが上手な（得意）のです。加えて、意味の領域では我々の誰よりも象徴世界をもとめており、それが一句一行に凝縮。その方法での完成度が高いです。

（これは彼の多行詩のほうでも同じ反応を得ているようです。詩にあつても、輪郭の崩れやすい現代詩のおお方とは違う、様式のしぼりのたくみさ、そこ一篇としての世界を感じるのです。

現代詩は、肉体の原点「声」に帰ろうとして朗読詩がひろがっています。文字ではなく声で、ダイレクトにわからせようとしている。寺岡さんの表現は、この傾向とは別の方向、あるいは方法をとろうとしているようです。しかし、彼はコーラスでバリトンを受け持つほどの歌唱力の人でもあり、文字は同時に声の響きを含んだものです。）

現代俳句は、ともすれば、発句的な屹立性から離れようとしており、それが大分定着しています。（いわゆる平均化現象、口語現象とあいまった流れです）。寺岡さんの俳句は、その中では帰って、古典的な近代俳句の型をたもち。

◎ 俳句 昨年二〇一三年の北の句会出句

- ・夜光虫梅雨に燃ゆればなほ蒼く
- ・あかときの銀河は乳を土器に汲め

「亀裂」の一部

銀河が

甘い乳なら

それを汲みたいと願った

・召天のわたしの影が薔薇を嗅ぐ 7月28日

・南国の砂乞ふ薔薇よ小夜あらし

「客車」の最後4行

南国の砂を乞ふ望みは

いつも

貧しい薔薇ほどにも

叶えられなかつた

・夏果ててリラ座の浜に捨てる櫂

「漂流」

星屑が天空を覆うふと

琴座の入江にオールを忘れた

少年の漂流が始まる

・端の歩を突きあふ二人海暮れて 9月8日

「王様」に酷似の表現がでてくる。

・鉄橋を越えて「北斗」は鳥となる

・殉難の鶴沓え沓えと海の紺

「誘惑」 p16~17

・星座冷ゆ白鳥罪を知らぬまま 12月1日

「落丁」

◎ 各詩篇の一部分の風景（俳句化）

◆ひそかな裸足

一二〇一四年五月十八日、神戸 詩を書く人たちの集いのために

安西佐有理

裸足だ

靴の中、靴下の中では裸足だ

朝の濡れた草はらや

昼のまとわりつく砂、

夜の川底でぬめる石こそ踏んでいないけれど

一日中

靴の中で、曲がった小指に至るまで

木綿ごしナイロンごし、

中敷きごし底革ごし、

アスファルトごしに、

ひそかに裸足の足は

街じゅうにはりめぐらされた、震える根を踏んでいる

幼稚園児のおしゃべりと、つながれた手の揺れに葉ずれを呼応させ

ながら

日々老いてきた、クロロンの桜を今年も咲かせ、

から元気な街路で、街の炎の薄れる記憶を吸いあげるハナミズキを

咲かせ、

三人家族の家の土台のしずかななごりが空地に残る路地の入口で

鋭い棘をかまえて寝ずの番をする黄薔薇を咲かせてきた

五月十八日、神戸の地下で震えつづける根を通る力は

その昔のワタシタチの、緑の導火線を通ってきた力

「北の句会」への投句には、詩の数行が、句を成立させているものがかなりみられます。そのままであったり、言葉がきつつけとなり、別の連想の通路ができたもの。

典型的な例をいいます。

「銀河」の句の例からも、句の形の一行詩をホグしてゆけば、その途中に詩の情景がひらけてきます。

詩《亀裂》では、羊飼いが、「銀河が甘い乳であればそれを汲みたい」のですが、俳句の「あかときの銀河」方では、何者かが「銀河」にむかつて「土器」（甕にそうとうする「うつわ」でしょう）に「乳」を汲めと命じているのです。

一句の意思性がここで際立っています。これを命じた者とは、まさしく「俳句」そのもののなのです。一句屹立の詩性（俳句をなりたす根源にいる詩の主体）です。俳句では句の中の「主語」の決め方が特異、場合によっては消え去ってしまうという特徴が指摘されますが、消えていうのではなく、形の外に出て一句を統括しているのです。俳句形式の底には、ひろやかな無限定さとともに、こういう独裁性もあります。俳句形式がもつ短さの意味、その美しさの性質は、そう簡単に体得できるものではありませんが、じつはぜんぶ表現された一行一句にあらわれています。詩形のこういう相違を理解しておられるところ、まことに感銘します。

★作品全体の詩型の交差混濁が意味するもの

寺岡さんの俳句志向は、吉田一穂と似ているようにも思えます。近代詩の当初には存在していた多行スタイルでの定型の追求、喩を使うのですが、それは見えない主語の存在を暗示する象徴として機能している、というべきです。これらは、口語化している現代詩が切り捨てたものです。

しかし、このようにすぐれて両義性ある詩集であるゆえに、さらにご本人自身が、病氣からの治癒の過程として、方法的にも切り開かれてゆくことをねがいます。簡単ですが、こういう感想につきまします。 平成26年5月3日

時間の輝きと無情のなかで、鎖につながれてうたわれる海の歌、鶏のレバーを洗った水で描かれる妄想の花々や鳥たちのうごめきをどこかのワタシタチから、生み出してきた力

初夏の明るい窓を確かめ

磨いたばかりの、あるいは、昨日の泥にまみれたままの靴を履いてワタシタチのひそかな裸足が踏む街の根の野放図なひろがり

街をいまだに揺らしながら伸びつづけ、浸食しつづけ、

無言で靴を磨き床を磨き鍋を磨き技を磨く今このワタシタチの

孤独な知恵をむすびつけ

それはワタシならぬワタシタチの、唯一の器官

根を通る力、根のひろがり

裸足の足は

靴の中、靴下の中ではひそかな裸足のワタシタチは

毎日、毎歩、接続と分断を繰り返している

根の上を歩き

根の力がワタシタチにも流れこむのを

思い出すとき

新しい花、新しい歌が、ワタシから

またひっそりとワタシタチへ、生まれでてくる

※ディラン・トマス「緑の導火線」、
「ファーン・ヒル」、セラフィーム・ルイの生涯と絵画
にも敬意をはらって

◆ いない猫のにやにや笑い

福田知子

—で、きみはどこに行きたいの？
—む・・・どこでもいい、さ
—きみは？
—・・・落ち着いて眠れもしない

世界中の幾人かのチェシャ氏たちが集まり
プカプカ煙草をふかしながら何やら密談をしている
耳を傾けてほしいノ状況はこうだ
極度に圧縮された缶詰がベルトコンベアを流れている
ラベルには【四つ足動物専用】と書かれているが
どうやら一部のニンゲンにも最近需要が高まっているらしい
ニクキユウ共和国にクーデターが起きてからのこと
それから

何年も美容院に置かれた女性週刊誌には
ついにかの紫御殿までにも及んだ
いじめのスキヤンダラスな記事が掲載されている
だが不思議なことにだれも頁をめくった痕跡がない

これら二つの事例をとってみても
煙に巻かれる時代さえすでもう終わってしまったことは
白日のもとに曝された??その証拠だ
だから密談の のち どうも
チェシャ氏は密かに二足歩行に転じたようなのだ

埃を被ったエア・カーテン
作動しなくなったエア・カーテン
カーテンのないさびしい区切り

◆ 『ゆきくれて』へのオマージュ、そして

有時秀記

朝の雨に飛び立つ鳥の影白み
行方も知らぬ旅に來しかな

(村上直之『ゆきくれて』所収歌)

霧雨のような朝の雨に羽を濡らして飛ぶ鳥を見たのは、いつ
ごろ見た夢のなかだったのか。

そして、その飛ぶ鳥は詩的な言葉にも濡れ羽のようなしたた
りをもたらし、心ある知恵の香りを残して去った。残された
香りは知恵の余韻だが、その余韻を感じるものは、地上と天
上の境に、そのあわいに、かすかな声を聴けるもののみでは
ないか、と彼の人が語るとおりであるだろう。

そして、急速にやってきた病魔が肉体をうばいとつたが、そ
の精神の滴りを短いポエジー集『ゆきくれて』一巻に遺し、
永遠に瞑目して果てしのない旅に出る。

検査官たちが「安全」と書かれたお墨付きシールを張り付け やつてきたの
は「物故世代 人間歴史博物館」で働くニンゲンたちと
それから さつきの二足歩行のチェシャ氏たち——

すでに取り壊された記憶——タバコ店の記憶を彼らから消すように
喫煙所は当初から無かったかのように 完璧に一掃されている
ひとたび入場するところではタバコはご法度だ
タバコを吸うものは
健康への認識が甚だ低い野蛮人(猫)だという別の新しいレッテルが貼られ
る

彼らはコンベアに乗せられ 多いときは鉄道で運ばれ どこぞの煙に巻かれ
てしまうのだ
煙草を吸うようなバカものどもは いつそ巨大な禁煙ルームに 閉じ込めて
おくのが一番だという同盟国のトップのお言葉により 両国 いや世界中の
国ほとんどが巨大な禁煙ルームになったのである

——それは体のためになるイイコトだから
——間違いないイイコトだからねえ
こんなわけで世界中が巨大な禁煙ルームと化したのである

一方 免税店で売られているのは
部屋いっぱい積まれたカートン単位の膨大な量のタバコ
挑発するタバコの山また山(…に 猫には見えるのだ!)

——ああ タバコが吸いたい!

——で、どこに行きたいの?

——どこでもいいんだ タバコの吸えるところなら

——でも世界中どこをどう探したつて もうどこにも喫煙所はない!

——じゃあ この国を煙に巻いてしまえばよいのではないだろうか?

——しかし その煙がないのじゃ致し方ない

だからこうして世界中を旅しているのだけれど……

ボクたちが宿る樹の上にもついに【禁煙】という札が掛った
——・・・ふくむ

世界中の善良なる皮肉屋のチェシャ氏たちが消えたのは
それからまもなくのことであつた

そして、彼の人は肉体を捨て、

「何も意志せず何も知らず何も持たない」

ようなところへ、ひっそりと、旅に出る。

そして、彼の人は、やがてくるあなたの未来、わたしの将
来、などと、単純には言えない。おおかたは、濡れ羽色の鳥
を夢のなかでは見ない。だから、骨は骨である。消滅は消滅
であり、あわいを感受しない。夢のなかで濡れ羽色の鳥を見
るもののみが、あわいを感受する。あらかじめ、私はいな
い、あなたはいい。ただ、濡れ羽色の鳥を幻視するもの
のみが、あわいに光る声を聴き、余韻を感受する。

そして、桃源郷はこの地上の果ての橋をわたる彼の人の幻視
のなかにのみあるだろう。

「何も意志せず何も知らず何も持たない」ような場こそ、彼
の人の消息を伝えるだろう。臙を感受する彼の人の消息を知
るもの、それは、みずからをささげるもの。彼方から流れく
る清冽な水の流れに臙にかかる橋に、みずからをささげるも
の。

そして、サクリファイイスのダリアが臙の橋のたもとに咲く
のは、彼の人の消息を知らせるすが。白い影が臙の橋のた
もとに咲くダリアの花に光の鳥を降らせる。影の香りを残し
ながら。ついに。

◆プラスチックな海

月村香

プラスチックと言っても質感ではなくあくまでもこの視界に入り込んでくる荒々しい色のことである何としても夜と一番違うところは銀色に輝いているところなぜならそこにほらソレイユがたまり始めるのが分かるでしょもう一辺もぐりこみたいこの滑舌の悪い口がさわやかに鳥をまねるときああこのように好き勝手していたい子どものようにベッドに斜めにかかったティッシュボックスから取り出した紙でうるうると小さき締めたくなるそんな存在のように明日も生きられるようにわたしは毛布をひっぱった

◆列聖

岩脇リーベル豊美

秘蹟の教えに献身した殉教者の魂は
真に了解する継承者もなく
来世に巡りめぐり異端の懐郷へと戻りゆく

詩が対象としない生命のない物体や概念
腐った赤い果実
工事現場に停止したクレーンの先端
時刻の到来とともに点る水銀灯
今日という日の崖淵の蒼色

宇宙全体に捧げるための
無規則変化の頌歌は衰えたが
普遍なるモチーフに置き換えられ
愛の象徴として語られることもある
愛は宇宙の創造だから
星たちはそこから出ずる無限の言の葉となった

聖霊がフルートを吹き鳴らし
葉草が可視世界の土壌に
控えめな花を咲かせるのを見る
生ける光が溪流の水で御足を洗い
トランスや瞑想ではなく覚醒の反映で
如実に現象の諸相を知覚すると
苦痛や悲しみが去り心地が蘇生する

無力さは清らかなひとつのアレテー
至高の異端が列聖式を挙げる

書法への抗い……詩集『龜裂』寺岡良信を読む

中堂けいこ

いわゆる現代詩手帖に代表される現代詩とは一線を画し、あとがきで機先を制しているように確信的な現代詩への挑戦とも受けとめられる書法である。私は詩人の態度の中に詩そのものへの愛着と言語美への深い憧憬を見る。その象徴的手法は言語の不易をめざしているとも言えようか。古語の現代での在り方、古語の持つ美的な感覚への強い意識は私たち詩を書く人間に言葉への美意識を再認させずにおかない。

今、生きている、生きていること。作者の強い心情、自律、倫理感が詩集をつらぬいている。世界を言い切る。一行の立ち方はこの鉄杭に打ち込まれた地面の確かさとハンマーの強さだろう。ときに詠嘆や哀惜に流れようとするのを、「幾筋もの龜裂だ」と自らを律していく。

目次は二文字熟語が横にきれいに並び、ほとんどの詩篇は見開きにおさまる短さであることを思えば、目次に並ぶ表題は意味の底でつながりを持つ。これは一冊の長編詩ともいえるかもしれない。

『銀河』よりわたしたちは／いつ森を追われたのか
「だが」から後半にかけて回帰から永劫につづく世界を「冬の銀河」に見る。傷々しいことはすくい上げながら意識の底に横たわるのは「自らの世界」への愛である。

◆選択

川田あひる

恩師の
あとを ついていく
悩むわたしの
うす暗く さみしい 道
停車場で
恩師を見失う
先生！
先生！
いつのまにか 人が増え
なつかしい同期生もいる
ポケットのそらを見せ ぼくら ここ
さあ、行こう

巻き込まれた

突如

雷鳴がとどろき

ちりじりになる

汗だくだ

選択はびしょぬれだ

恩師の顔が貼りついた目で

答えをだせども

即 アンチテーゼが

いつぶくの茶をすすめる

でんわが鳴る

でんわが鳴る

なにも

言えないか

言えないか

いや、

必ず。

◆ 歌う人

上野 都

太古からの約束は
今日 書かれたばかりの文字のように

ざわめきやまない風
ふいに静寂を破る瀬音
闇に潜む生き物の吐息
何万年もの夜に滲み
眼窩に染みついた燠火と
曙光の長い影

その影を引いて
蒼い天を抱いたとき
人は 立ち
歌いはじめた

歌う人

河の名前

山の名前
樹々の名前

名前という歌

名前という約束

北へ踏み出した時から

人は水を求め

その歌は

転生の海へと流れやまず

決して満ちることのない水辺を抉るが

それでも歌は書かれ

記憶を刻む

文字になった約束は
小さなランプの焰芯となって
歌う人の影に添う

いつも書かれたばかりの歌

永劫を照らす白砂が

天の指からこぼれ落ちるたび

寄る辺に歌われる一枚の楽譜

満ち引く潮の果てを

記憶の羅針は指しつづける。

◆ 川柳連作 赤毛同盟

情野千里

探偵はやさしくポークパイを齧る

髪赤く染めて愛人公司日本支部

脅迫状が届く未来のわたしから

ギムレットが苦い成層圏の恋

美術教師が売るホームズの白い粉

いつせいに歯茎を腫らすカルト集団

サイコパスがいつぱい 酸っぱい黒スグリ

弁髪探偵 猫を並べてさてと言う

寺岡良信詩集『龜裂』の感想

藤井かえ子

今回は、前回までのように、感想を一つの文章にまとめて上げることができませんでした。特に出産後は、なかなか自分だけのまとまった時間をとれない生活の日々です。詩作も研究も全然できていません。そんな自分ですが、感想をお伝えしたいと思い、細切れなかたちではありますが、一つひとつの詩を読んだ感想を書きとめたものを、そのまま送ります。全然こなれていない拙文をお許しください。お読みいただけますと幸いです。

* 鍵穴 / 「明け方」「暁」、ほの明るき時間の世界。他の詩でも、よく登場しますね。夜をひきずりながらも、少しずつ明るくなっていく。寺岡さんの詩のトーンを象徴しているように感じます。鍵束の音、表札の裏返し、盲いた指のハープ、音の表現が素敵。「忘却はいつも翼ある背のかたちをして」のくだりについて、もっと書きたい。
* 落丁 / 夜一夢一人生？ 生きていることは夢なのか？。落丁した後の世界。生きるこへの一つの世界観。考えが提示されているように感じました。
* 誘惑 / 情熱的。素敵なお詩ですね。もし、『龜裂』の中で一つだけ朗読する詩を選べたら、私はこの詩を選びます。

* 系譜 / 「母」という言葉にちよつと引つかりました。「女たち」という言葉ではどうでしょうか。「系譜」を守るのは母？でも、「系譜」を「系譜」としてまとめるのは「父」？「男」？ちよつとそこに引つかけてしまっています。もつと続きの展開が欲しいように感じました。
* 漂流 / 美しい絵画の世界。ざわざわとした音の風景。鳴き声を失ったカモメの羽ばたき、波の音。その統一感ある情景が美しいです。

* 棄教 / 「雨季」という言葉が、他の詩でもよく出てきますね。この季節を詠われていることについて、お話を聞きたいです。遠藤周作の作品がモチーフ？
* 斑猫 / 「陶工」「少年」「斑猫」…どれも寺岡さんかしら？ご自身を詠われた詩のように感じました。

* 出棺 / 静けさが香る詩ですね。
* 投身 / 勇氣、力強さを感じる詩。寺岡さんの詩では、「女」は力強く、情熱的なもののように感じ、「男」はそれとは対照的に、静かでどこことなく淋しく感じます（少年以外は）。そのへん、私がジェンダーとして「女」だからでしょうか、やっぱ引つかけてしまいます…。

* 放逐 / スケールの大きな詩ですね。
* 王様 / 三連目以降の軽妙な表現がいいですね。最後の

「それ」が、何を指しているのかわかりにくかったです。
* 幸福 / うつろな感じを覚える「幸福」。キリコの「街の神秘と憂愁」の世界のようですね。

* 海市 / まさしく蜃気楼のような美しい情景の詩ですね。朗読候補2番目です。

* 龜裂 / 「龜」。人の体は六割が水でできている」と、何かで聞いたような気がします。「人間」を譬えた言葉として「龜」は使われているのでしょうか。その表現の鋭さ、深さを感じ入りました。「みない」と言い切って終る。切ない詩です。

* 陋屋 / 空白感が際立つ詩ですね。主（人間）に寄り添い、そして「灰」となって消えて行くもの。寂しさの中に、自然というか、自分を囲むものというか、それらの放つほんのりとした温かみを感じました。

* 遺棄 / 少し短く感じました。この続きの展開を欲しいな、と思いつつも、一方で、この詩の表現のスケールの大きさに、「遺棄」されるとは、実は、このように、何かしら「大きなもの」によって、突然置き去りにされることなのかもしれないな、と感じ入りました。
* 連弾 / 生きていること、それは、常に「影」との連弾なのだろうか。考えさせられました。

* 銃身 / アジア太平洋戦争がモチーフにあるのでしょうか。かつての戦争の歴史を詠むのに、こんな表現展開があるのか？と、学ばせられました。洞察の深い詩ですね。

* 姿態 / 目に見えるもの、かたちのもつ官能、潜む欲望。「投身する女」という表現、他にも使われていますね。寺岡さんがあとがきで「保守主義者」とご自身をたとえられていたのは、どちらかというところの固定的と思われる、ジェンダー観に由来するところもあるのかな？

* 砂浜 / 「死」を詠われたのでしょうか。淡路島の私の実家では、旧暦のお盆の8月15日に、藁を束ねてつくった「舟」に、餓鬼さんへの食べ物などを詰め込んで、海に流していました。砂浜から海へと流れて行くその情景が脳裏に浮かびました。この世とあの世との「結節」を象徴する砂浜や海。静かな、とても静かでない、詩ですね。

* 客車 / これも、砂浜と同じく、「死」を詠われたのでしょうか。4連目を読んで、「そういうものと捉えられたか、死を臨むとは」と、勝手にひとりごちてしまいました。その表現の妙に、深く考えさせられました。「南国」という表現、イメージについて、お話を聞いてみたいです。

* 銀河 / 3・11、「フクシマ」をモチーフに詠まれた詩でしょうか？ 私はそれを想像しました。

* 女神 / 文明というものに潜む虚ろさをえぐり出した詩のように感じました。

◆化身

大橋愛由等

風力3にたじろいでいるわけではなく

迷った手と迷った手が出会って絡みあいひとつの借景を作っていることに気づかないふたりは互いのうなじの白色の度合いを確認するかのように佇みながらその庭園に来るまでに思い浮かんだ魔王のかずかずの顛末を語り合っているうちにいつのまにか「ワタシタチ」なんて使い慣れていない詩語をかわしていることに気づいて

譲り葉の置き手紙はついで見つからず

新緑の一片一葉に名前を聴いている少年を見つけたらきつと話しかけてみようと思っていたのは五月の悲しみが山と海にこだましていた新月の日であったはずなのだが少年は一向に顕れる気配はないのでまずは少年の名を付けることから始めようと「ワタシタチ」の口にてかかったその時に現れたのが四尺三寸一分の長棒をもった化身であり二人を囲むように楕円を描いて去っていくのを見届けて

温帯の風はかわたれ刻にゆるゆる溶け

どうすればこの楕円を抜け出ることができのだろうかとか或いはこのまま樹蔭を避けながら園内を回遊しつづけているのだろうかとか思案しているうちに庭園には入口はあったものの出口は見当たらないことに気づいたふたりはここから退園して世界に企投するには化身になるか溶ける風になることによつてしか「ワタシタチ」というアポリアから抜け出せないだろうと語りあうのであった

◆誰のための世界というか

中堂けいこ

歩道橋を歩いていると向こうから知らない男が渡ってきた。男は右肩にサルをのせている。すれ違いざま、お前にはデーモン[※]が見えるのだなという。サルは男の肩口から威嚇するように歯をむき出した。わたしは振り向かずやり過ぎた。デーモンという語調が耳に残り嫌なモノが入り込んだようでもわたしはすっかり滅入ってしまった。日暮れどきの街は忙しげに人々が往来し他人の気分などお構いなしだったがその時になつて往來の人々が肩になかしらに乗せていることに気づいた。そのなにかしらは物体であったり動物であったりちぐはぐな印象だが人の肩にしつかり乗せられているというよりはぼんやりとした形のあるふうせんのような止まり方だった。ゆらゆらと陽炎のようにある若い女はライオンを乗せているし道の端のホームレスらしい男は薬缶を乗せている。新聞紙にくるまる初老の男の肩にふうせんみたいにくつついている薬缶は蓋を閉じたり開いたりしながら注ぎ口がゆれている。若い女のライオンは口に生肉の血を滴らせて灰色の眼が光っている。女はピンヒールの踵を蹴りながらライオンのたてがみが顔にかかっても気にもとめない様子だった。スクラブル交差点では大勢の人々がそれぞれの方向に行き交う。それぞれに肩にそれぞれのモノを乗せキリンだつたりバットマンだつたり植木鉢なんかがゆらゆらと互いに幻影が交差するようで殺伐な都会の様相がすっかり様変わりしていることに驚いた。駅前に人だかりがあつて背の高い黒尽くめの服の

男が拡声器で演説していた。男の背に巨大な象が乗っていた。象はときおり三百眼をむいて長い鼻を振り回した。もちろん誰にも当たるとはしないのだがその素振りには醜悪だった。いつのまにかわたしの傍らにサルの男がいた。俺には自分の肩に乗っているモノが見えない、お前は言つてはならない。だからお前の肩のモノを俺は言わない。他人にしか見えないのだ。それから演説者のほうに顎をしゃくりあの男の肩のモノも言つてはならない。おそらくお前と俺とは違うモノが見えているのだから。わたしは訳がわからなくなつた。なんだかバカにしていると思えた。拡声器からわれわれのせいかいをかえる！われわれがかえなくては誰のためのせいか！わたしはうそをつかない！きつとあなたがたはわたしをしんじる！象は白目をむいて笑つたように見えた。わたしの世界はわたしにしか見えない。なのにわたしは自分のデーモンさえわからない。

明け方ベッドで寝返りをうち右肩を下にした。わたしのデーモンはわたしのモノだ。首筋を払いながら他の者のことを思つた。昨日のホームレスの男は一生を薬缶のように暮らしたにちがいない。他人のために水を汲み他人のために水を注ぐ。自分には少しばかりの水を底に残して。汲み続ける薬缶を誰も世界の中で見つけられない。わたしはわたしを知るこ

※註：ラテン語でエウダイモニア「幸福」の意。ギリシヤ宗教のダイモン。その人の正体（*Entity*）。人間は自分の正体を知ることができない。デーモンは一生その人の背後にとりつきその人を眺める。他人にのみ見える。アレント「人間の条件」292頁より引用。

◆花はいつでもそこにあつた

富 哲世

花はいつでもそこにあつた
みどりはどこにでも見えた
ビルのあいだに山のかたちが
立体交差の道の上から
谷越えの
霞に沈むベッドタウンと
その更に遙か沖には
迫り上がる水銀の水平線が
島と街とを結ぶ
巨大な吊り橋が重々しい驕りの四肢で
涼しい翳りを昼の街角に忍ばせ
目覚めて見るわたしたちの夢の翼のはかなさを
巨大な触手で横断して以来
わたしたちの出会いと別れは
キャンバスを破って突きだして来る縮尺の違う舳先のような未来
に脅かされている
つまずきもどかしさもいつの間にかこころない速度をまとって
しまう
それは日々の胸苦しい
移ろいの罨だろう

◆約束

寺岡良信

海が燃える
波頭が燃える
牝馬の初潮とともにめぐりくる
この五月に
グノシエンヌを弾く
サテイの夜はつめたい
月桂樹につたふ雫はつめたい
クノッソスの丘に
ささやく雨となつて
夜明けの群落を慰めつづけた私の
最期のひとつぶに
溪流は約束をした
おまへは虹の魚を身ごもつた
おまへはもう人へは戻らない
浜辺に盲しひて
肌理なめらかな風を恋ふ貝よ
蒼い残響でのみつながらる空の回廊と
無垢な生き物たちだけにくる五月が
汚されぬために

風溜まりの透明巨人や

季節の花壇をやさしく赦して

せせらぎの雲の湧く水色の大空の下

血の汚物を吐き出しつづける黒い大地の淵に浮かぶ

一脚の木の椅子に座つて

行つて戻らぬものたちの帰りを農夫のようにじつと見ている

花は喋るといわれても

それはどこか狂つたところの比喩だから

ことばの中心には予測不可能な平衡と

再来の自傷かいまも目を見開いている

それがひとの重さだろうか

耐えきれないものに身をゆだね

たつたいま酔いから醒めてふと気が付いた

午後の日差しを染めてしまう歌ものがたりの真近さを

だれも否定はできない

走り去る太陽を追いながら

盲目の冒険者となつてゆくものは

みんな思い出の狩人

大丈夫だよ

みんな順番に消えてゆくから

花の嘘や

風景の淫らなみどりを遣り過ごして

お手でつないで野道をゆく

人もネコも

少しだけさびしくいられる

◆たずね人

野口 裕

金属バットがからから転がり
大声を上げていた子は
ころつといなくなる
いやまいったまいったの形に掌を置くと
頭骨の奥底から耳鳴りが響く
安いよ安いよと手を叩く魚屋のように
ぱちぱちとコロツケを揚げる肉屋のように
雨上がりの夜気は
緑を含み
過去を連れ立って
やってきた

◆眼鏡をはずしたら出かけよう

高谷和幸

せんぶりに噎せかえるからだのような深層だった。「いつだったか、時間の眼鏡をはずしていったよ」と、新芽のことばがそよぐ庭がからだを誘っているのに違いない。わたしが歩いている五月のわたしになりきって、「ダービーのゲートは開かないが、死んだ草原ならどうするだろう」と、牝馬のミオソチスが走っていた庭をなつかしんでいる。歩く後ろ向きに、富山の行商人が腰かける、あがり框のそこそこに病人の貌がかげついていた時代があえぎ始める。「おかあさんの玉虫はどんな具合だったでしょう?」、唾を指につけ、障子の小さな穴から自分を寄集める視癖が今も完治しないでいる。ますます過敏になる身がおかあさんを布団にくるんでまわくまわしているのだ。自分が分からなくなった暗所のリビドー装置にやわらかい蓋をあてがい、「空間の眼鏡はもういらない」、相棒の馬がゆらいでいて重く感じられる。昔の京都までの足音の綱渡りがつづき、脱水が効かない洗濯音から、それがクマを明示するように、粉飾という言葉が思い出せなかった、昨日の盲目のプラトールが、狭い洗濯槽の暗喩に変わってしまった。「残像を出し切ったら出かけてみよう」。新芽たちはフェナキスコープのように、暗い穴から太陽ばかり見て一日が過ぎる。そういえば、五月はあなたが死んだ前の月だ。

◆青い馬

にしもとめぐみ

走って 走って走って
失われた時間を走った
呼んだのは
誰の名前
母馬と姉弟馬
並んで走っていたはずなのに
母も弟もいつのまにかいない
呼んでみたのは
今日の私の名前
もう遠い昔なので姉弟で
遊んだ夏の庭の草の香りも
通り過ぎた風も
呼んでいるのは
昨日までの 母
弟は先に逝ってしまったから
姉馬はいつまでもひとり
草原を食む
呼んでいたのは
確か
Kotiku(記憶)
もう戻れない

◆ハライツ

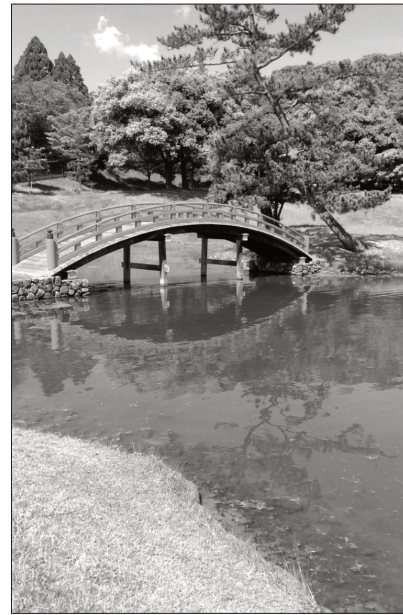
今野和代

らあーりらあーりらーれらと歌う人
くびれた人への鎮魂歌?
らあーるらーれらーりらーら投げ活けの
黒百合かおる教会のオルガン弾きの酔っ払い ハ
ライツなんか あるものか サタンもマリアも
くるくると わたしのなかの渦巻は
乱打の激しい旋律と
暗い苦悶のアレグロと 光と影の シ
ラブルさ 焼けてく 焼けてく 夕まぐれ
クロスも 鐘も 神の子も 焼けてく 焼けてく カテド
ラル 焼けてけ 焼けてけ
草野原 破壊も懺悔も悔恨も ねじりん棒の オラトリオ 火
の子 春の子 射手座の子 ハレルヤ ハレルヤ ふくいんも
焼けてく 焼けてけ 空と海

◆アマガエル

中嶋康雄

アマガエルが指をいっばいに広げて
ボクの口と鼻を覆う
ビニールのように
完璧な手で
あと何十秒かで窒息してしまう歓喜
ボクの惨めな舌で
ペロペロ嘗めると
アマガエルが苦しみながら
笑い転げる歌が
ボクを踊りに誘う
ピヨピヨ
十ミリを九秒で
走るステップがもてはやされ
高揚するアマガエルの緑井戸
緑井戸にウヨウヨいる
オタマジヤクシの
腹に渦巻く腸の鎖
ボクの真空の尻の穴が
支配へ渦巻く緑の腸を
吸う音だけが
井戸に響く
テレビの孤独
惨めな線形の笑顔
雨の夜
無数に生え狂う微細のイボの競演する
痒い痒い指で
光り輝くビルのガラス窓を
ひたすら這うボクの宿主
ひとりぼっちの
アマガエルよ



奈良・旧大乗院庭園

浄土庭園に漂う タナトスと廃園

そこは枯山水でも回遊式の庭園でもなかった。

学生時代に訪れた平泉にある毛越寺の〈浄土庭園〉に出会った時の衝撃が、わたしのそれからの庭園観に大きな影響を与えている。たまたま旅の宿として選んだのが毛越寺の境内にあるユースホステルだった。かのユースホステルというのはいわゆる早稲田に起こされる。宿泊していたわたしを含む若者たちが宿のひとに起こされてもさきと戸外に出てみると、そこに広がっていたのが、朝もやがかかった庭園だった。この世のものとは思えぬ穏やかな表情をたたえていた。水平にゆるやかに伸びたその配置は、宗教心と信仰心を全面拒絶していた二〇歳代前半のわたしにも、「これが浄土か」と想起させるのに充分な魅力的存在だった。時間が停止しているかのような無時間のうるわしき空間に身も心も心酔してしまった。

浄土庭園は巧みに水面(池)や築山などを配置することで清浄感を醸し出している。その庭の配置の巧みさは平安時

代に書かれた『作庭記』に既にきめ細かく記述されている(インターネット上で現代語で読むことができる)。

〈浄土庭園〉の魅力はどこかタナトスを内包していることであるかもしれない。無時間の世界とは死後の世界でもあり、「常」⇨うつろいゆく日常⇨がない「無常」の世界であるといえよう。また〈浄土庭園〉がさかんに作られた平安時代からおおよそ一千年の時間が経過しているの、一度は廃園になったものもある。つまりいまわれわれが見ているものは庭園として一度廃園⇨死んだ存在であつたものが蘇っていることになる。つまり〈浄土庭園〉は廃園を内包しているのである。

こうしたタナトスと廃園の魅力をたたえた浄土庭園のひとつに奈良の旧大乗院庭園がある。南都随一の庭園と言われ、善阿弥(三六六〜四八二?)が作庭したと伝えられている。今では、庭園のみが残っているために、庭園が単体で自律しているかのように見えてしまう。それは毛越寺庭園も同じなのだが、作庭された当初は庭に寄り添うように館が建っていて、宇治の平等院のような館と庭園がセットとなっているのが本来の姿なのである。

このために庭園のための庭園として単立に見ているのは、庭園を含むその場所が一度廃墟となったことによるためなのである。つまりその浄土庭園は現存するが実は廃園ないしは廃墟が形象を替えて顕現していると言つていいのかもしれない。

旧大乗院庭園は、近世以降に造られた回遊式庭園のように花が咲き、滝があり、四季の変化を体現しているといつたはなやぎの要素が少ない。一度廃園になった庭園を忠実に再生しようとしているために、かつてそこにどんな樹木が植わつて、どのような花が咲いていたのかは分からないことから、掘り起こされたそのままの姿にとどまっていざるを得ないのであろう。この意味でも、旧大乗院庭園は廃園の気配が漂っているのである。そしてこのありようは、青年時代に見た毛越寺庭園のイメージそのものなのである。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.91
めらんじゅ

2014年05月25日 通巻91号
発行所/月刊『Mélange』編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(『Mélange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円(税込)